子どもの感性は おとろえつつある

室谷幸吉

タタミにも　ホクロがある
ぼくのアゴにも　あるけどネ
タタミの　ホクロは
なんだろかな。

〈五才・男〉

＊

サクラの花が　ちったから
うちのバンソウコウで
はってあげましょうよ。

〈五才・男〉

これを詩とみるか、みないかは、読む人の自由である。咲く花を美しいとながめ、小鳥のさえずりを耳にして、のどかだとききほれるのは、人間の自然の情だろう。それと同じように、

お空を
ナイフで
シャッシャッと切ったら　いいな
空がおっこちて
空気がなくなるよ

それでもヒコウキは　とべるよ。

〈五才・男・哲〉

という子どものコトバにふれたとき、このコトバをウラで支えている子どもの心の動きに思いいたって、「いいな、美しいな。」と思うのは、人間として自然なあり方ではないだろうか。まだある。

雨は　なってんのはにのって
ひるねしている
フトンをひいて　ひるねしている
フトンからころげて
なってんのはに　ぶら下っている
それがおちると　みにのった
みは　くびをふりながら
こもりをしている。

〈七才・女・ようこ〉

＊

台所に
ぼくのぬいだクツの片方が
ひっくり返っている

妹のゲタは
ハの字になっている
こんな所にも
ぼくがいた。

〈十二才・男〉

いいではないか。よむ人の心を清らかにうつものがある。うん、そうかそうか、なるほどな——と、生命の純粋な地点で、感動に胸をわななかせる力がある。だから、生きていることはうれしい。楽しい。意味深いものだ、と、生命を肯定させるあたたかい力——。

おかあさんはネ
ふとってるから　まるいものすきなんだって
それで　マリ　買ってくれたの
おとうさんは　やせてるからね
ほそながいもの　すきでしょ
だから　刀　買ってちょうだいよネ。

〈五才・男・哲〉

＊

おにんぎょうは
ひゃっかてんに
いくらでも　うっているけど
わたしは　どこにも
うってはいない
せかいじゅうに
わたしはたったひとりだけ
それに　かあちゃんは
わたしを　しかる。

〈五才・女・雅代〉

＊

一ぴきのあり
葉かげに入った
出たときは　なんだか
大きくなったようだ。

〈十一才・男〉

＊

ていでんの　風の夜
れんたんの
十二の赤い目。

〈十二才児〉

物にふれ、事にふれて、このような見方・考え方のもてる子どもは、もてない子どもにくらべて、ゆたかな人生を経験しつつある、といってもまちがいはなかろう。

私は、子どもオトナも、ゆたかで、あたたかい物の見方のできる人間・感性の純粋さを失わない人間に育っていくこと、また育てていくことが、生命の真実にそむかない、ほんとうの生き方であり、ほんとうの教育だと信じている。

ライオンとトラと　どっちがつよい？
インドのライオンと
インドのトラと　くらべても
インドのライオンのほうが
ずっとつよいんだよ。

四才七か月のサトルの日記に、こんなコトバが記録されている。

ヒューヒューって
口ぶえふいてるの　なあんだ

ほら
風が　口ぶえふいてるよ
あれ
むこうの家が　こわれたよ
ちがうよ　あの家
さかになっているんで
こわれたように　みえたんだよ。

満五才のサトルの目と心がとらえた一風景である。

同じ年の春、サトルは父といっしょに船に乗って房州勝山へ行った。その時の彼の心の躍動と緊張が、つぎのような一連のコトバとなって残されている。

トンネルがまがってるから
まっくらだ　よ
ホラ　光がみえてきた
シブヤのえきが　みえる
トンネルの中も
ね　シブヤっていうんだよ
トンネルの中も　シブヤだよ。

乗船場へ行くため、朝、私鉄で渋谷駅に着く直前のものである。

この舟は　アワジまる
せんに勝山にいったのは　タチバナ丸
あ　みんな　ルがつくんだな
ルでしょ　いやいやちがう
海上保安隊は　イ　だ
イがつくのもあるネ。

＊

きょうの海　あらしみたいだ
サイダーみたいに
せんたくのアワみたいに
ジュースみたいに
波がさける。

ある日の夕食の際、サトルの心はこんなふうに動く。（五才四か月）

おかあさんは　カタツムリ
　ふとってるから
おとうさんは　やせんぼう
　いいや　シミだよ
　本きちがいだから——
おねえちゃんは　ナメクジで
ヤコちゃんは　毛虫
ぼうやは　ヤセッポの　三角ガオだから
　カマキリだよ。

そのサトルが小学校に入って以来四年、どうしたというのだろう、これという感動的な記録が全くないのだ。

だが、これは、なにもサトルという特定の子どもに限った現象ではない。これは、こんにちの子どもたちの大部分に、共通に認められるところのものである。

「幼児は、すべて詩人である。」という見方は、人間というものを、素直に見つめた人のコトバだと思う。

とすると、多くの子どもたちは、幼時に芽生えさせた貴重な生命のフタバを、少年期において、しぼませたということになるようである。そして、それは正にその通りなのである。

では、子どもたちは、いつ・どこで・どうして尊い生命の芽生えの伸びを停止させたり、萎縮させたりしてしまうのであろう。

肉体的早熟に並行しない精神的晩熟、こんにちの子どもたちの、人間形成上の困難な問題の生じてくる源は、この二つのものの並行をはばんでいるギャップにある。落書き式・話の泉式知識の断片は、あふれるほど、こぼれるほど多量にとり込まれているのではないか。断片知識のおびただしい堆積の下に、埋没してしまった感性の芽、問題はそれだ。

★――1

くろい雲が　かえっていくから
もう　雨　ふらないね
みんなよそにいって
雨ふらせるんでしょ

五才四か月のヤス子のことばを、言ったままに、父が書きとめたものだ。ヤス子の目は鋭い。彼女の心の動きにはひらめきがある。一日に一つ、二日に一つと、彼女の味わいふかいコトバに、父はふれることができた。

あめがふって
とうもろこしがゆれている
はっぱに　あめが　のぼってる

五才七か月のコトバである。父の耳にとどかない彼女の発見――詩的表現――は、どれくらいあるかしれない。おそらく父の耳にうけとめられ、書き残されたものの十倍はあるだろう。

おてんとさまはネ
ラジオのいったこと
ちゃんとまもらないわネ
だから　きょう　はれたでしょ
おてんとさま
ラジオのいうこと
しらないんだわ。

＊

サトルちゃんと　おとうさんが
ひとつフトンに
あたまをならべて　ねたよ
ぼうずあたまが二つならんだ
サトルちゃんのあたま
四角ぼうず
おとうちゃんのあたま　長ぼうず。

小さな詩人――父は、ヤス子の将来に、それとなく大きな期待を寄せた。それは彼女を詩人に仕立てあげようというのではない。彼女が、今のような心のひらめきを末長くもちつづけ、深くあたたかい目で物をながめ得る人間になること、人生の、生命の真実を誠実に掘りあてることに喜びを感ずるような成長の道すじをとってくれるだろうことに、多くの楽しみをかけたのだった。満六才四か月――学令に達したヤス子は、小学校への門をくぐった。

わたし　あしたのにゅうがくしけん
うれしくって
はやくいきたいわ
いいおようふくきるんだもん
わたし先生のとこへいったら
おはようございますっていうの。

一日一日が待たれた。やがて七月、一学期が終り、夏休みを経て秋を迎える。ヤス子は人なみに平がなを収得し、書こうと思えば、自分の心の中にうごくものを、自由に書きうる力をもった。

しかし、しかしである。入学以来のヤス子は、以前のようなうるおいのある心の動きを示さなくなった。心を閉じ、コトバをはかなくなった。

「詩の手帖」というものを、父は考えて作った。ワラ半紙を四ツに折ってかさねてとじ、画用紙で表紙をつけた。家族の者が、母も、姉も、もちろん父も、いっしょにエンピツをにぎり、おのおのが感じたこと、思ったこと、みつけたことを自由に書きつけようというのだ。「詩」というコトバや形にこだわらずに、だ。

大きいまりと
小さいまりと
ならぶと
大きいまりは　おかあさんみたい。

ヤス子は書きつけた。またこんなのもある。

おねいちゃんが
しずかちゃんの家へいった
やすこは　こたつにあたりながら
そとをみていた
そしたらじどうしゃが
あかりをつけて　はしっていった
あかりは　とうだいみたいに
ぽっとついていた。

しかし「ひかれ者」の気重さでやっている仕事らしく、自然な心の燃焼の産物とはいえそうにないものが多かった。

せめて一と月に一度は——と、メドをつけてふみ切った仕事だったが、三号雑誌みたいに三月こっきりで尻キレトンボになり、後がつづかずじまいになった。

とこうするうち、ヤス子は、小学二年になり三年に進んだ。知識的成長に見るべきものがあるのに、なぜ、ヤス子は、感性的方面の実りや収穫を見せないのであろうか。フシギというよりは、父にとって不満だった。先生の指導がよければ、入学前に芽生えていた子どもの、あのかがやく目（芽）は、盲いついえるはずがない。それが、芽立ちのまま萎えしぼんでいったのは培いがなかったからだ。父は、ヤス子の受持の先生に、ヤス子をふくめて、すべての子どもたちに、もっと書くよろこびに、ひんぱんにふれさせてほしかったと思った。

しかし、残念ながら、ヤス子の先生は、あまり子どもに書かせたがらないタイプの先生だった。〝作文〟と名のつく学習は、一学期に一度あったか、なかったか、といった具合である。

どんな先生にも得手不得手、好みがあるということは悪くはな

い。だから、私は、すべての先生に、〝詩人であってほしい〟などと、身勝手な注文をつける気持はさらさらない。しかし、私の目にふれる先生の多くは、前述のヤス子の担任教師をふくめて、あまりにも詩人、または詩人的でなさすぎる。それでは、子どもの心身の円満な生長を托する唯一の心だのみの精神的技師である教師として、いかにも心細いのである。

子どもは正直なものだから、先生を先達とし、先生のゆたかな感性にふれつつ、自らの感性をも高めみがいていくにちがいない。こんにちの子どもらの、物の見方のうるおいのなさ、ギスギスしたガサツな生活態度は、〝導き〟の不足によるところ大なるものがあると思う。あれもこれもの原因を、教師の指導の仕方の到らなさという一事に帰すことはまちがいだが、それがきわめて有力な原因の一つであることを信じないわけにはいかない。

めざめた人たちの、着実な結びつきを通して、失われた〝人間〟の〝復興〟を実現させようではないか。

★――2

子どものもつ本来的な詩性をすりへらしているものの一つは〝生活の多忙さ〟である。それが子どもの創造性をぶちこわしたり、萎縮させたりしていることに気づかぬ親たちは意外に多い。困ったことに、そういう親たちに限って、なんだかんだと、子どもの生活にさまざまなものを持ちこみ、子どものエネルギー消費に権力で干渉を加え、子どもたちの生活を一層せわしくし、一層疲れさせようとやっきになっている。

「子どものため」――この合いコトバみたいなコトバを一枚看板にして、「子どもを思う」親の熱心さをみせびらかそうとして、実際は子どもを思わない無情な親になりさがって来つつあることに、一向気づいていない。

二年生の教室に「うめのみニュース」というクラスの名をとった〝かべ新聞〟の場所を作った。家庭内のこと、近所のことに気をつけていて、何かかわったこと、みんなに知らせたいことがあったら、その時その時に紙に書いてはり出そうと約束した。ところが、そこに一週間たっても、半月たっても一枚のニュースもあらわれない。

「ニュースに出したらいいことが、ほんとにみんなの家にないのかな。書くのがめんどうで、怠けて書かないのかな。そのどっちだろう?。」休み時間に、掲示場の前で遊んでいる子どもたちに先生がいうと、

「ウウン、あるのよ。ほんとはニュースがあるの。」と、返事は素直である。「じゃ、なぜ書いて出さないの?。」「だってさ、せわしいのよ。わたし、ピアノのけいこに行ってるでしょ。ピアノから帰ってきたら、家でしなければならない勉強もあるでしょ。だから、いそがしくてとっても書けないのよ。」というマリのいいわけだった。このことばのウラには「助けてくれ。」という哀願のひびきがあった。

きのう・おととい日ようびでした。おとうさんが、

「二月からえいごをやんなさい」っていいました。ぼくが、

「いいよ。ぼくやらないよ。」といったら、おとうさんが、

「いや、やんなきゃだめだ。」っていった。ぼくが、「やるんだったら、中学からやるよ。」っていったら、また、おとうさんが、

「いや、中学じゃだめだ」っていった。〈六才・男・愛治〉

子どもの生活の多忙さは、このようにして加重してゆくばかりである。一方で、貴重な人間的感性をすりへらしながら――。

★――3

刺激過剰が良からぬものと承知しつつ、なお過剰を生みつづけ、幼い生命を溺れさせ、食いつぶしてゆくのが現代の怪物マス・コミである。商業主義である。

文化の恩恵の乏しい時代の子どもたちは、こわれたソウケザルを母にもらうか、台所のスミから見つけだし、それをかかえて、野川に走り、川面をおおう茂みのかげにあてがって、ドジョウをとり、フナをとらえた。今の子どもたちは、そのような魚すくいを、自身の意思と、エネルギーによってやろうとしない。(したいと思っても、思い通りにできない事情や条件もあるにはあるが……)ベッタリ畳にすわりこみ、紅茶をすすったり、チョコレートをしゃぶったり、ガムなどかみながら、テレビで用をすませてしまう。行動にうったえジカに体験する魚すくいではなく、視覚にうつす魚すくいの映像だけで、安直手軽に代用させてしまう。

なるほど畳の上であるから、川に捨てられたビールびんのかけらをふんで、足の肉をそぐこともないし、イバラに腕をひっかけてカスリ傷を負うおそれもない。だが、その安全さは、子どもにとって幸せというべきか、どうか。

家庭における幼児の育て方に、幼稚園での教育やしつけの仕組みに、そして学校教育の分野で、子どもらの〝主体的経験〟が、広く深く配慮されたり、あたたかく迎え入れられているとは、どうしても私には思われないのだ。これが私の見誤りであればうれしい。

子どもらをマスコミの囚われ人にしてはならない。むしろ氾濫し過剰なマスコミを思い切って切りすて、そうすることによって、子どもらの手に、主体的創造的な生活を返してやること、それが何よりも必要なことではないか。

★――4

生活、そして人生の意義は、どんな形であろうとも、何かの形で、生産に結びつくところに見出される。

子どもらは、生産活動の過程中に、正しくふさわしく位置づけられた時、ほんとうの人生をとらえ、生命の意義を体得することができる。生産活動の中に、子どもを適切に位置づけるということは、幼い子どものエネルギーを、労働力として利用すべきだということではない。人間が、そして子ども自身が、何によって生きており、生かされているのかを、子どもに知らすことである。

健二の父はY会社の課長さんだ。その健二の家に会社から電話がかかってきた。四年生の健二が電話口に出る。

「課長さんのお宅ですか。」と電話の主がたずねる。

「え?。」と健二はきき返す。「アノ、課長さんのお宅じゃありませんか。課長さん、おいでになりますか?。」

そこで健二は、「うちはちがいますよ。うちは高沢です。」と答えた。後で健二が両親にいったそうである。

「家のおとうさんは課長さんなのか。へえ、ちっとも知らなかった。」

地方農漁村の子どもらには、親たちと一つになって、共通な生産活動に、参加する機会がわりあいに多い。これを、単純に、農漁民

の生活の貧しさからくる、やむをえない、いやいやながらの悲しくみじめな行為である、と考えてはいけない。子どもは、労働と結びつくことによって社会を勉強し、人生を学習することができる。

あの気笛
たんぼに　きこえただろう
もう　あば（母）がかえるよ
八重三　なくなよ
たきものをいのって　※になって
坂道を行きはじめた。
足がおもかった。
足を下した坂道
ひざぼんさんが　じゃんとなって　※ひざがしら
とことこ　走った。
べんぷが　ちぎるるようだ。
広い道に下した。
からだが風に吹かれるようだ。
首の手ぬぐいをのけた。
首が長くなったような気がした。
〈十才児〉

声以上に、これらの子の心の姿の正しさ、美しさ、まじめさ、強さに感動させられる。

おじいさんが
まぐさを　きっている
私は草をはこんであげる
くらい牛小屋のかげで
おじいさんのおす　おしぎりのはが
ぴかっと光った
むこうの竹山が雪で白いよ。
〈九才児〉

働く姿を愛情深い目でながめている子どもの心の高まりをよみとってほしい。だが、なんといっても、感動深く、力強いのは、子ども自身が働きに加わっている場合である。働きの中で感じ、働きの中から生まれてきた考えである。

だいこんをつんでいると
ちゃちゃぎが「チャッ　チャッ」とないた
ふゆがきたので　よろこんでないた。
〈七才児〉

★――

では子どもの生活をコマギレ的散漫化からすくい、詩的感覚や詩的感受性などの純粋感性を高め育てるには、どうしたらいいか。それには四つの方法がある。それは、これまでに述べた四つの現代的欠陥をウラ返しにした方法を講ずるということである。

1、詩に理解のある（その理解は必らずしも深いことを要しない）先生によって、ひんぱんに、ものを書く機会を与えられること。

2、親の虚栄や「子どものために」という取り越し苦労を、子どもらの生活にわりこませない。子どもの生活流動を時間的に再検討し、多忙化による精神的疲労から救う。

3、過剰な刺激から子どもを守るために、適当にマスコミを遮断し、子どもに主体的自主的な生活時間を与える。

4、できるだけ生産活動にジカにふれさせる。

この四つの方法は、心の向け方・意識の持ち方ひとつで、だれにでも、どの親にでもできることなのだ。子どもが、真の人間性を獲得する、という大きな結果を考えるならば、この程度の配慮や、生活態度の変更などは、むしろ軽すぎる努力だといえないだろうか。それを忌避する理由もなければ、無視する怠慢もゆるされはすまい。〝感性の母〟になり得ない知性などというものは、土台どこかがズレているのだ。それは知性のマヤカシものだ。〝知性〟は〝感性〟という親を、くい殺す鬼子ではないはずのものだ。

知性と感性との一体化・知性と感性との相乗効果の上に、人間性の花をさかせるために、四つの方法が与えられているということを、私たちは喜ばねばならない。

〈幼　児〉

喜ちゃん
　　おようふくとりかえたよ
　　お山もみておくれ
　　本もみておくれ
　　はっぱも　みておくれ
　　白く光るよ
　　むこうも光るよ。

＊

がっこうへくると
　　みんなが　おれの顔をみる
　　へんなかおでみる
　　おれのことを　おとっちゃんという
　　おとっちゃんという
　　おとっちゃん
　　おれのズボンだ
　　おれのズボンが　おかしいんだ
　　おれのズボンは
　　カアキいろで　上がふとくってだぶだぶして
　　下がきゅうっとほそくって
　　おまけにそこに　あなぼこがあいて
　　ひもがとおしてあるんだ
　　そうして　でっかいつぎがある
　　それだから　わらうんだ
　　それだから　おれの顔をみてるんだ
　　おとっちゃん
　　それでもいいんだ
　　これでも　このズボンは
　　かあちゃんが　かあちゃんの手でぬったんだ
　　おとっちゃんが死んじゃって
　　かあちゃんがはたらきにいっている
　　わらわれたっていい
　　わらわれたって　はいてゆくんだ
　　このズボンはかあちゃんがぬったのだ。

このようにして私たちは、幼年期には詩人である人間を、少年期になると散文家にし、成人期に達して、至極退屈な漫談家にしたり苦情家にダ落させないですむのである。

（明星学園）